

5月合評会作品『ダーク・シャドウ』考察

合評会担当 郡山翔平

考察

役者の演技は優れていて楽しめるし、手間を掛けたセットや衣装により、ティム・バートンらしいダークな世界観が構築されている。一つ一つのシーンには優れたものもあったが、一つの物語としては失敗作であると言える。

『ダーク・シャドウ』の時代設定は1972年である。バーナバスが眠っていた期間は1966年なので、バーナバスは1776年にヴァンパイアにされて生き埋めにされたことになる。1776年とは、7月4日に、アメリカ合衆国が独立を宣言した年である。ここまで厳密に年代が指定されていることが偶然であるとは考え難い。

メイン州コリンズ・ポートは架空の町であるが、メイン州は実在する。当時のメイン州は独立した州ではなく、独立宣言に署名した13州の1つであるマサチューセッツ州の飛び地という位置付けであった。当時のアメリカはイギリスとの独立戦争の最中であり、メイン州は、アメリカ軍とイギリス軍が衝突した場所である。

イギリスのリバプールから入植してきて、漁業を牛耳っていたコリンズ家は、当時のアメリカの宗主国であったイギリスのメタファーであると考えられる。そう考えると、その漁業を乗っ取ったアンジェリークはアメリカのメタファーということになる。1972年のコリンズ家の家長の名前が、イギリスの女王を連想させるエリザベスであることも、コリンズ家のイギリスのメタファーとしての意味合いを強めている。アンジェリークはバーナバスが愛したジョゼットに嫉妬し、魔法でジョゼットを断崖から突き落とす。これは、イギリスの東インド会社の船の積み荷の紅茶をボストン湾に投げ捨てた、ボストン茶会事件のメタファーであると考えられる。バーナバスは、ヴィクトリアが「ヴィッキーと呼んでください」と言うと、「省略してはいけない」と戒める。この理由は、イギリスの女王の名前を省略することが礼儀に欠ける行為であるからだと考えられる。

ティム・バートンが『ダーク・シャドウ』に籠めたかったメッセージの解釈を試みたが、このメッセージの解釈には問題がある。

ヴィクトリア女王は、繁栄を極めた大英帝国を象徴する女王であるが、その在位期間は1837年から1901年であり、1776年に生き埋めにされたバーナバスが知っているはずが無い。ティム・バートンがヴィクトリアをイギリスと結び付けるとすればヴィクトリア女王以外に考えられないので、ティム・バートンの単純なミスであると考えられる。

1776年のアメリカは、まだ他国によって承認された国ではなく、イギリスを支持す

る「王党派」も少なくなかった。しかしバーナバスは、1972年に目覚めた際、アメリカを当然のように「国」として認識しており、イギリスに対する帰属意識は見られない。誇り高いイギリス貴族であったバーバナスが、アメリカ独立を推進する「独立派」の立場であったとは考え難い。「王党派」の立場であれば、何らかの形で悲しむ描写を見せるべきであったと私は考える。「独立派」にも「王党派」にも属さない中立の立場であれば、どちらかに属する以上に難しい立場に置かれることになる。196年の時を経て蘇り、時代の流れについていけないバーナバスを描くのであれば、この「国」の問題は避けて通るべきではなかったと私は考える。

つまり、メッセージに説得力を与える設定の練り上げ方が雑なのである。

イギリスとアメリカの対立構造を原作に増して強調した理由は、バーナバスにティム・バートン自身を投影したかったからであると考えられる。ティム・バートンの作品群に共通するテーマは、異形の者への愛である。ティム・バートンは、原作のバーナバスに共感した理由を、「周囲に全く溶け込めない状況は、当時の僕そのものだった」からであると説明している。ティム・バートンは、キャリアの中盤から活動の拠点をイギリスに移している。アメリカに溶け込めなかったティム・バートンは、19世紀のイギリスをモチーフとしたヴィクトリアン・スタイルに自分の芸術を見出した。分かり易い影響が見られる作品が『アリス・イン・ワンダーランド』である。イギリスのヴィクトリア王朝時代を描いていることもあって、衣装もヘアメイクもヴィクトリアン・スタイルで統一されている。豪華な装飾と過度の上品さが特徴的です。196年前からやってきて周囲に溶け込めないバーナバスには、19世紀のイギリスをモチーフとしたヴィクトリアン・スタイルに傾倒する、アメリカに溶け込めなかったティム・バートン自身が投影されていると私は解釈した。

『ダーク・シャドウ』でティム・バートンが描きたかったものは、異形の者への愛である。ティム・バートンの作品群で描かれる異形の者への愛は、二種類に分類出来る。

一つ目は、異形としての個性を、正義や創造力といったポジティブなエネルギーに転換する種類の異形の者である。代表的なものは『シザーハンズ』のエドワードである。社会から隔絶されて育った人造人間であるエドワードは、純粋で繊細な存在となった。愛する人を抱きしめたくても、ハサミの手ではそれも叶わずに苦しむ。これによりエドワードは、観客が共感し易い、愛すべき存在となった。

二つ目は、異形としての力を、自らを排斥した者への復讐というネガティブなパワーで発散する種類の異形の者である。代表的なものは『バットマン・リターンズ』のペンギンである。奇形であるが故に差別されてきたペンギンは、激しい怒りと劣等感から、邪悪で醜悪なモンスターへと成り果てる。

バーナバスは、悪い意味でこのどちらの種類の異形の者にも属していない。

バーナバスは、自分に逆らう者は徹底的に追い詰めるが、据え膳は頂く。バーナバスは殺人を犯していて、本人はそれをアンジェリークの呪いのせいだと主張するが、客観的に見て責任転嫁に見える。

バーナバスは封建主義の時代のイギリスの考え方に従って行動している。主人の誇りためであれば、職人や召使は手足や命などを喜んで差し出して当然であると考えている。当時は気に入ったメイドに手を出すことは珍しいことではなかった。運悪くメイドが身ごもった場合は、お金を渡して生活に困らない程度の男性の所に嫁に出し、産まれた子どもはその男性の子どもということにして口裏を合わせれば事なきを得ることが出来た。そのバーナバスからすれば、たかがメイドの分際で何故手を引かず、愛を望むのか不思議であったと考えられる。

全ての発端は、バーナバスがアンジェリークに手を出したことである。そもそもバーナバスがアンジェリークに手を出さなければ、アンジェリークは黒魔術に手を出さなかったであろうし、ジョゼットも死ぬことはなく、バーナバスも異形の者とはならなかったと考えられる。現代の価値観を持つ観客からすれば、メイドに手を出して、自分は愛する女性と結婚するなど身勝手に思えるし、本当にジョゼットを愛していたのであれば、メイドに手を出さなければ済む話に思える。

バーナバスは、観客にとって愛すべき存在ではないので、一種類目の異形の者には当てはまらない。周囲の排斥によって苦しめられたのではなく、自分から異形の者となるきっかけを作っているため、二種類目の異形の者にも当てはまらない。

つまり、バーナバスは確かに異形の者であるが、観客は共感出来ないのである。ティム・バートンがキャラクターを作る際には、全てのキャラクターを理解し、親近感が湧くように心掛けているそうだが、『ダーク・シャドウ』ではこれが失敗に終わっていると言える。196年という年月のギャップをコミカルに描くことが目的だったと考えられるが、それにより肝心な異形の者への愛が描けていない。バーナバスに共感出来ないため、コメディとしても笑えなくなっており、監督が観せたいものも、観客が観たいものも達成出来なかったと言える。時代設定などには不必要なこだわりも見られるが、設定の細かい部分にミスが見られ、設定の練り上げ方が中途半端である。メッセージに説得力を与えるためには設定を練り上げなければならないが、設定によりメッセージが説得力を失っていると言える。

『ダーク・シャドウ』に登場する異形の者はバーナバスだけではない。ティム・バートンは、「全ての家族は変わっていて、どの家族にも独自の力関係があり、それが家族の魅力だ」と語っている。

キャロリンはオオカミ人間であるが、オオカミ人間であることの物語上の必然性が無い。キャロリンは確かに異形の者であるが、唐突に明かされた異形の者であるという事実から、観客は何も感じる事が出来ないのである。

唯一異形の者への愛を描くことに成功しているキャラクターがアンジェリークであると言える。バーナバスに弄ばれたことで異形の者となるが、愛故にバーナバスを殺害出来ず、最後は自らの心臓を差し出すが、それすらも受け取って貰えない。ペンギンと同じ種類の異形の者に分類出来る。単なる悪党ではなく、痛みを抱えるキャラクターとして描くことを試みたようであるが、これは成功したと言える。

キャラクターが多過ぎてエピソードの羅列となり、一人一人が掘り下げられていないので観客の共感を得ることが出来ず、全体としての繋がりも無くなるので観客は盛り上がる事が出来ない。最後にとってつけたような大作らしいアクション・シーンを挿入し、強引に映画をまとめようとしている。アンジェリークはバーナバスに振り回されて自殺し、ジョゼットを蘇らせるためにヴィクトリアの存在は消え、バーナバスのために周囲の人々が犠牲になっている。観客が共感出来ないキャラクターがハッピー・エンドを迎えたとしても、観客は結末に納得出来ないと考えられる。

結論としては『ダーク・シャドウ』は、ティム・バートンとジョニー・デップが、好きなドラマをまとめただけの作品なのである。一つのメッセージへ向かって物語を積み上げていくものが芸術である。羅列されたエピソードの一つ一つが面白かったとしても、メッセージが描けていなければ芸術にはなり得ない。娯楽としては楽しめるかもしれないが、ティム・バートンとジョニー・デップの自己満足に付き合わされただけであると言える。

会員の感想

一回生

・てっきりコメディ色が強いと予想して観に行ったら、全然違った。バーナバスが人殺しすぎる上に結構なクズで、全く感情移入できなかった。むしろ魔女の方がよかった。数百年の年を経てもなおバーナバスを憎みながら愛しつづけ、ついには恋に破れ死んでゆく。魔女サイドから観たいと思った。

・CMが悪い。コメディ要素うすいじゃないですか。全体のまとまりも良くないです。個々の魅力は十分なのに……惜しい。でも嫌いじゃないですよ。皆さんがハードルを下げてくれたおかげかも。唐突な展開は脳内補完、合理化してあげましょう。愛の力です。私はそういうケレン味が好きなんです。もう一度作りなおせば良作になるはず。原作設定を改変し、コメディ色はもっと減らすべき。128分には要素が多くて描ききれないです。この作品はすばらしいポテンシャルを秘めているはずなんです……。

二回生

・ストーリー的には中盤まで退屈で、明らかに描ききれない部分が多いが、なんとなく久しぶりにティム・バートンらしい映画を観た気がする。登場人物の『ビートル・ジュース』感や、『バットマン・リターンズ』や『シザーハンズ』的なテーマなど以前のティム・バートン映画で個人的に嫌いじゃない。

・バーナバスが人殺し過ぎ。ホフマン博士殺した理由がわからない。(最後に生き返った？けど一生海底生活か)博士いなくなっても誰も気にしてなかった……。予告編の作り方に意図的なものを感じた。あと狼人間の設定カットしても良かった。

三回生

・風景の画、セットデザイン、登場人物のビジュアルなど、画面に映るものの様々は「さすがティム・バートン」という感じで良かった。ただ、主人公に感情移入できないし、ストーリーが雑な印象を持った。1972年という時代設定も良かっただけに、残念。中途半端な映画やったね。

・久々のティム・バートン&ジョニー・デップ作品ということで期待してた分、ちょっとがっかりな映画でした。別に映画館で観なくてもいいな……。男の子の母親幽霊や女の子が突然、実は狼人間だった、など展開やキャラ設定が少々浅かった。でもジョニデさんの奇怪演技や『スウィーニー・トッド』を思い出させる血のシーンなどはしっかり“ティム・バートン映画”でした。